まちづくり・生涯学習情報誌

らしっく

自分らしく、粋なくらし

Vol.68
薄氷号
2024.3

うすらい／凍てついていた空気が少しずつ緩みはじめる春先に見られる、ほんの少し軽く触れただけですぐに割れてしまうような、とても繊細な氷。

CLOSE UP

4年ぶりに再開 地域イベント

大文字応援プロジェクト
地域に根づく伝統行事「大文字まつり」を、住民一丸となって開催

五日市西地区秋祭り保存会
「ちょいさぁ!」と威勢の良い掛け声と共に復活した「けんか神輿」

伴学区「あんぜん・あんしん防災町民運動会」実行委員会
楽しみながら防災力を高め、地域の結びつきも強くする

連載

▶らしっくレポート　大イノコ祭り　祭りが人と地域の技術、文化をつなぐ
▶らしっくコラム　大学生による地域活性化の取り組み　▶ようこそ！公民館へ～中区内公民館～
▶人材バンク 名人 宝人 達人　▶Hm助成支援団体のご紹介　▶情報の森　▶プラザ通信

特集1

地域に根づく伝統行事「大文字まつり」を、住民一丸となって開催

ライトアップされた根谷川から見る高松山

CLOSE UP

4年ぶりに再開　地域イベント

令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行され、社会はコロナ前の活気を取り戻しつつあります。
長いコロナ禍を経て、4年ぶりに再開されたさまざまな地域イベントを紹介します。

大文字応援プロジェクト

6つの地域団体が連携し、プロジェクトが立ち上がる

安佐北区可部町の高松山（標高339m）の頂付近に、75個の電球を縦55メートル、横45メートルに並べ「大」の文字を灯す伝統行事「大文字まつり」が、コロナ禍を経て令和5年5月に4年ぶりに復活。令和6年も開催予定です。

▲ 高松神社大文字保存会・山本一雄会長（左）と可部駅前町内会・土井和正会長（右）

大文字まつりは、約300年前の1720年に、可部地区で起きた大火を機に始まった初夏の地域の風物詩で、京都の大文字と共に全国でも珍しい行事として、長年親まれてきました。戦争中の一時期、灯りを灯すのを中断したのを除いて、ほぼ毎年行われ、昔は、提灯にロウソクの灯を灯していましたが、現在では電球の灯りを灯す形になっています。平成27年以降は、土砂災害やコロナ禍などの影響で、相次いで中止に見舞われて開催したのは平成30年、令和元年の2回のみ。まつりを担う地域住民の高齢化なども重なり、昨年も開催が危ぶまれましたが、その話を知った6つの地域団体が連携し「大文字応援プロジェクト」としてサポート、開催にこぎつけました。

「灯りを灯す高松山の頂付近に生い茂った、木の枝やシダの葉を刈り取る事から始まり、山頂にある高松神社を参拝する参道の整備など、人員や力仕事が必要になります。慣れ親しんだ地域の伝統行事を絶やしてはいけない、その思いのもと、一つにまとまって、多くの人が協力してくれました」と話をしてくれたのは大文字応援プロジェクト実行委員長を務めた可部駅前町内会の土井和正会長と、大文字まつり自体を担う高松神社大文字保存会の山本一雄会長。2人は、気心知れた幼馴染の間柄ということもあって、密なコミュニケーションを図りながら、準備に取り組んだそうです。

▲ 三入和太鼓クラブの演奏の様子

予想を上回る大盛況 再開を待ちわびた住民の期待に応える

令和5年5月27日、28日に行われた「大文字まつり」当日、JR可部駅近くの明神公園でプロジェクトメンバーによる応援市を開催。飲食や雑貨ブースを設けたり、可部高等学校吹奏楽部や、三入和太鼓クラブによる演奏なども行われました。また可部駅前の商店でも、共同で特典を用意するなど、オール可部で祭りを盛り上げ、当初は300人ぐらいと考えていた来場者も、実際には予想をはるかに上回る5,000人近くの人が会場付近を訪れたそうです。27日夜、夕闇に包まれた高松山の頂に「大」の字が輝くと、明神公園近くを流れる根谷川沿いに並んだ見物客からは、大きな歓声があがったそうです。

「コロナ禍で各地域の行事が自粛、やっと規制が緩和され行事が再開される。大文字まつりは、その先駆的な行事になったと思います。地域住民の団結した協力があったからこそ、再開できたと思います」と土井さん。また意外にも10代から30代の若い世代、家族連れがまつりの会場を訪れているのが目立ち、プロジェクトメンバーも驚くと同時に、世代を超えて楽しんでもらえた事に達成感を感じたそうです。

「高松神社大文字保存会のメンバーは11人しかいなく、高齢化も進みできる事も限られています。再開を諦めかけた事もあるけど、地域の人たちがサポートしてくれ、まつりを盛り上げてくれた。時代の変化に伴う課題もある中で、どんな形になってもまつりは絶やさず続けていきたいですね」と保存会の山本会長。まちぐるみで、地域の伝統行事を守るプロジェクトに取り組む皆さんの活動に、熱い思いを感じました。

「大文字まつり」は、令和6年も5月25日（土）に明神公園でイベントを開催予定。当日と翌26日（日）の夕方からは、高松山の頂に、灯りが灯されます。

▲ 住民が描いた大文字まつりの絵

らしっく　自分らしく、粋なくらし
Vol.68 薄氷号 2024.3

contents

01 特集 4年ぶりに再開　地域イベント
▶大文字応援プロジェクト

高松山に輝く「大」の文字
▶五日市西地区秋祭り保存会

けんか神輿で神輿どうしがぶつかり合う様子
▶伴学区「あんぜん・あんしん防災町民運動会」実行委員会

防災運動会の様子
05 らしっくレポート　ひろ記者が行く
▶大イノコ祭り　祭りが人と地域の技術、文化をつなぐ
らしっくコラム
▶大学生による地域活性化の取り組み
広島修道大学 人文学部 英語英文学科
石田 崇 准教授
06 ようこそ！公民館へ
▶中区内公民館
07 人材バンク　名人 宝人 達人
▶ハンドメイドクリエイターグループ菜花 代表　神尾 友里さん
▶落語の講演　大声トリオ
▶導眠整体師・良質な眠り研究所 代表　永見 保浩さん
10 Hm²助成支援団体のご紹介
▶ブルーベリーくらぶ
11 情報の森
15 プラザ通信

※掲載している各団体への問い合わせは発行者である（公財）広島市文化財団まちづくり市民交流プラザまでお願いします。☎082-545-3911

「ちょいさぁ!」と威勢の良い掛け声と共に復活した「けんか神輿」

五日市西地区秋祭り保存会

工夫してコロナ禍を乗り切り復活。そして伝承へ

広島市佐伯区五日市に江戸時代後期から伝わる「けんか神輿」。五日市東、西、北それぞれの地区の神輿がぶつかり合う様は勇ましく秋祭りを大きく盛り上げる存在でした。昭和48年を最後に中断していましたが平成6年、「けんか神輿の復活」を合言葉に「五日市西地区秋祭り保存会」が発足。地域住民の協力により、まずは五穀豊穣を祝う「俵神輿」、その後長年壊れたままの「宮神輿」の修繕に取り掛かり5年の時を経て平成11年に復活させました。続いて平成23年に東地区、平成26年に北地区それぞれの「宮神輿」の修繕奉納が行われ平成27年の秋祭りでは五日市東、西、北地区3基の神輿が47年ぶりに揃い、伝統の「けんか神輿」が蘇りました。

コロナ禍の3年間、「けんか神輿」は中止を余儀なくされましたが、その間も工夫を凝らし保存会として独自に祭りを開催。交流のある神楽団も特別参加し木遣(きや)りを唄いながら町内を巡行したり、コロナ退散の願いを込め五日市八幡神社でお祓いをした「厄除」を配布したりと、「今できることを」みんなで考えながら活動したそうです。

そして「祭りを絶やしてはいけない」という思いがつながり、令和5年秋には4年ぶりに本来の祭りを復活。10月8日に開催された五日市八幡神社例大祭では各地区から集まった3基の宮神輿が塩屋神社までの約2キロを渡御。「ちょいさぁ!」の掛け声と共に「けんか神輿」も披露され見物客からは大きな歓声が上がりました。「昔のような激しいぶつかり合いはできないが、伝統ある祭りの風景を、より多くの人に見てもらいたい」と話す同保存会名誉会長の東窪信之(とくぼのぶゆき)さんは、「日本の伝統文化は絶やしてはいけないという思いで活動している」と熱く語ります。

▲ コロナ禍で独自に行った祭りの様子。交流のある神楽団も参加

祭りだけではなく、地域活性化を目指すさまざまな活動

近年、子どもの数の減少などの理由から子ども会の運営が難しくなってきている地域も多いなか、同保存会の地区も例外ではなく3年前に子ども会が解散しました。それを受け現会長の濱田憲昭(はまだのりあき)さんは「季節の行事を通して地域ぐるみで子どもたちを育てていきたい」との思いから、一昨年から同保存会が呼びかけ「子ども神輿」のお世話もしているそうです。また、同保存会にある太鼓部は地域の介護施設の慰問に出向いたり、祭り以外にも誰もが楽しめるイベントなどを企画・開催するなど、その活動は多岐に渡っています。

祭りを維持・発展させることにより、人と人とのつながりを大切にし、地域の活性化を目指している同会。「みんなが顔見知りでつながりが持てたら、災害などいざというときにもスムーズに協力し合えるのでは」と考えます。

「けんか神輿」が復活して今年で30年。ここまでの集大成と協力してくださった地域住民の方々に感謝の思いを込めて、「神楽祭り」も企画中だそうです。祭りが単なるイベントではなく楽しみながら伝統を継承し、地域住民の絆が深まっていく様子は、皆さんの尽力の賜物であると感じました。

令和6年の秋祭りは10月13日(日)朝8時出陣式の予定です。

▲ 宮神輿を担ぎ五日市八幡神社から塩屋神社までを渡御する様子

楽しみながら防災力を高め、地域の結びつきも強くする

伴学区「あんぜん・あんしん防災町民運動会」実行委員会

https://www.com-net2.city.hiroshima.jp/tomo/

途絶えていた運動会が、防災運動会として復活

広島市安佐南区の伴学区15町内会で構成される伴学区町内会連合会が、災害時の対応に役立つ知識の習得や作業をプログラムに組み込んだ運動会「あんぜん・あんしん防災町民運動会」を、令和5年4月に4年ぶりに開催。令和6年も4月に開催を予定しています。

現在、約3,000戸、8,000人近い住民が暮らす安佐南区伴学区では、50年以上前から毎年春に町民運動会を開催していました。しかし、子どもの運動離れやマンネリ化を背景に参加者が減少、平成29年からは雨天とコロナ禍で中止になりました。そんな中で、平成26年8.20広島市豪雨土砂災害以降、住民の防災意識が高まり、防災の専門家を招いた講演会や、防災訓練を行っていた経緯もあり、町民運動会にも防災を取り入れたら楽しめるのでは、といった意見が浮上。令和元年に町民運動会と防災活動を組み合わせた運動会として再開しました。

運動会で楽しみながら防災を学ぶ

「前回の令和元年の時は、危険を周囲に知らせるための大声競争では、参加者はどんな風に声を出していいのか戸惑っていましたが、4年ぶりの昨年の運動会では最初こそは遠慮がちだったけど、気がついたらみんな必死になって大声をだして。ポールと毛布で担架を作ってマネキンを運ぶ「担架で逃げよう」などは、日頃はなかなか付き合いの薄い住民同士が交流を深めながら走ったり。子どもから、大人まで世代を超えて、連帯感を持って楽しんでました」と伴学区町内会連合会会長の加藤栄治(かとうえいじ)さん。

▲「担架で逃げよう」の様子

▲伴学区町内会連合会・加藤栄治会長

コロナ禍の規制が緩和された昨年は、地域住民約700人が参加。防災種目には、地震による火事を想定したバケツリレーや、河川の氾濫から守るための浸水ブロックリレーなどの種目も。また、自動体外式除細動器(AED)の使い方を学ぶコーナーや、消防団の放水デモンストレーションも行われました。「全てのプログラムに防災の要素を取り入れるのは大変ですが、半分以上は災害に対応した種目を組み込んでいます。楽しみながら防災を学べる内容で、気軽に楽しんでもらいました」。

少子高齢化や地域住民の減少。自治会、町内会の維持など年々さまざまな課題が浮き彫りになっているそうですが、万一の時に備え、地域全体で防災への意識や住民間の連携を強めるきっかけ作りになれば、と加藤さんをはじめ、運営に携わる皆さんの地域に対する熱い思いを感じます。「昨年の運動会に参加された住民、さらには他の地域行事に参加する人の表情を見ていると、誰もが生き生きとしています。いろいろと運営面での課題もありますが、今後もできる形で継続していければ」と加藤さんは語ってくれました。

令和6年は4月21日(日)に伴小学校で開催予定(雨天中止)。一般の方は運動会への参加はできませんが、見学は可能です。詳細はホームページをご覧ください。

▲「バケツリレー」の様子

▲「浸水ブロックリレー」の様子